

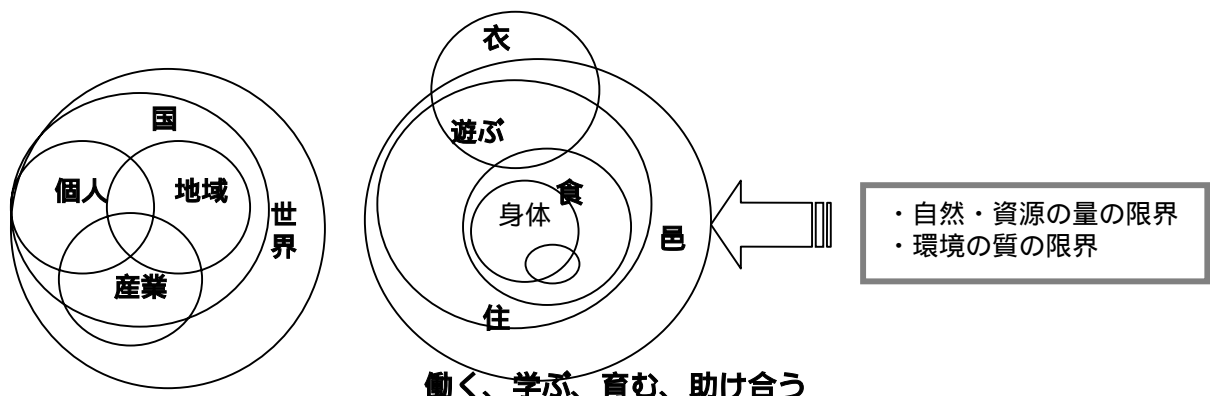
ワークショップ

「 暮らし未来像を考え実行する活動 」

如何に暮らすか、如何に生きるか

地球規模の資源と環境を視野に入れ、
最新の科学的・社会的知識と、昔からの経験と知恵と、想像力を駆使して
生命を尊重する

21世紀の生活基盤(衣食住)と生活圏(邑)のあり方を探る



日時： 2002年1月26日(土)午後1時 9時
27日(日)午前9時半 12時
場所： 御茶ノ水スクエア A館・B館

主催： MORI MORI ネットワーク 「暮らし未来像ネット」プロジェクト
このワークショップは平成13年度環境事業団地球環境基金の助成を受けています

「くらし未来像を考え実行する活動」(2002年1月26日現在)

実行委員会：

黒坂三和子 暫定委員長、

安藤多恵子(市民エネルギー研究所代表)和田幸子(富士ゼロックス(株)監査役室)

江戸京子(アリオン音楽財団理事長)、黒田杏子(俳人)、真下淑恵(沼田市議)

役重真喜子(岩手県東和町役場職員・畜産家)

実行委員会スタッフ：

相澤佳余、福田佳子、辻麻里子、藤崎理恵、平野由紀子、斉藤陽子、澤千恵、

石田靖彦、若原園江、田川由紀子、遠藤文江、目々澤淳、南育絵、堀淳一郎

特別参加：足立治郎

臨時スタッフ：岡田猛、櫛田泰平、笹川恵理、川満雅子、外川美穂

2000年11月30日における発起人：

鮎川ゆりか、安藤多恵子、児矢野マリ、石坂佐知子、伊庭みか子、鶴浦真沙子、

江戸京子、桂睦子、川口順子、岸美佐、黒田杏子、佐久間淳子、田久保美恵子、

千原好美、中西準子、原育美、浜本由里子、真下淑恵、松本泰子、役重真喜子、

山縣睦子、和田幸子、黒坂三和子(呼びかけ人、発起人幹事)

ワ-クショップ開催経費：地球環境基金の支援と自己資金

<問い合わせ先>

くらし未来像ネット：暫定代表・黒坂三和子

川崎市多摩区東生田 1-17-5

Fax:044-932-5805

Tel:044-932-5893

E-mail:VYQ05062@nifty.ne.jp

目次

ワークショップ・プログラム p.5

プログラム詳細 p.9

開催趣旨 p.7

パネリスト、コーディネーター、話題提供者 プロフィール p.15

参加者リスト p.25

別冊資料：

1. OHP 資料 「今、世界では、今、日本では」
2. 各分科会の要旨、論点
3. 背景資料

プログラム

1月26日(土) 午後12:00 開場

I. 全体会合 1 午後1:00 - 5:00 (お茶の水スクエアA館ルーム6)

開会挨拶：和田幸子

趣旨説明：藤崎理恵、足立治郎、黒坂三和子

パネルディスカッション：**未来の多様な暮らし方、生き方を求めて**

共同司会：安藤多恵子、黒坂三和子

パネリスト：江戸京子(ピアニスト)、黒田杏子(俳人)、役重真喜子(畜産家)

* どのような変化がおこり、どのような問題が起こっているのか。

香西泰(経済学)、小林料(エネルギー)、鬼頭秀一(環境倫理)

* なぜ、日本ではこの視点が欠けていたのか、未来への助言は何か。

特別参加：永井多恵子(世田谷文化生活情報センター 館長)

谷みどり(内閣官房副長官補付参事官)

一方井誠治(環境省地球環境局国民生活推進室長代理)

参加者の質疑応答 / 四つの分科会のモデレーターと話題提供者の紹介

夕食(同会議室にて): 午後5:15-5:45

II. 分科会 午後5:45 - 8:30 (お茶の水スクエアC館会議

室)

分科会 1 「着る」(衣): C館会議室 3号室

コーディネーター：黒田杏子(俳人、実行委員)、藤崎理恵(大学院生)

話題提供者：三輪倫子(消費生活コンサルタント)、上山弘子(染色家)

分科会 2 「食べる」(食): C館会議室 5号室

コーディネーター：山本加津子(編集長)、役重真喜子(畜産家、実行委員)

話題提供者：中村靖彦(「良い食材を伝える会」主宰)、山崎洋子(「田舎のヒロインわくわくネットワーク」)、安藤カーキー(TVディレクター)、菅原
歆一(地域情報誌「かがり火」編集長)

分科会 3 「住む」(住): C館会議室 6号室

コーディネーター：松井晴子(編集者)、西本和美(編集者)

話題提供者：長谷川敬(建築家「緑の列島ネットワーク」代表)、富田玲子(建築家)

三澤文子(岐阜県立森林文化アカデミー教授)

議論主要参加者：鈴木洋子(健康な住まいを考える会)、常山泰弘(大工さん)

山崎正代(レストラン山猫軒)、桑原次男(クワバラ・パンぱき

ン)

**分科会4「助け合い、育み合い、学び合い、遊び、憩い、競い、働き、移動し、
人間同士が生きる場」(生活圏): A館ルーム6**

コーディネーター: **江戸京子**(ピアニスト、実行委員)、**鬼頭秀一**(東京農工大学教授)

話題提供者: **菅谷明子**(地域のメディア、地域の図書館)、**望月信一**(カーシェア

リング)

交流会 午後 8:50 - 10:00 (ホテル聚楽)

1月27日(日) 午前 9:30 12:00

III. 全体会合2 午前 9:30 - 12:00 (お茶の水スクエア A館ルーム

6)

- 1 分科会の報告と意見交換
- 2 今後の行動計画に関する意見交換
- 3 まとめ (実行委員・事務局)

[参加費: 3500円 / 交流会費: 2000円]

プログラム詳細

1月26日(土)

・ 全体会合 1 午後 1:00 - 5:00

未来の多様な暮らし方、生き方を求めて：

日本で短期間に為された急激な経済成長（量的拡大）によって起こった生活基盤と生活圏の質

的な変化や崩壊の問題と、未来の方向を様々な視点から議論する

・ 分科会 午後 5:45 - 8:30

衣、食・住・生活圏の4分科会において、

(1) 今、どのような問題が起こっているのか

現在の様々な現象や問題は、個人の価値観と社会の制度や構造に関連する。

- 何が問題で、原因か：特に、資源と環境の限界を視野にいれて
- 日本が育ててきた生活の知恵のよい部分、残したい部分は何か
- 問題の部分、改善すべき部分は何か

(2) どのような「暮らし方」をすれば問題を解決できるのか

- 個人でできること、個人がすべきことで変えられることは何か
 - * 具体的な手段や手法など技術的な観点から
 - * 暮らし方や生き方を貫く「価値観」の観点から
- 制度、構造などを変えなければならないことは何か

分科会1「着る」(衣):

「着る」行為は、身体を守るという基本的な機能に加えて、自らの個性を表現する手段でもあり、また、自ら紡ぎ縫う、或いは、飾り楽しむ遊び心は、豊かな人間性を育むひとつの重要な要素である。しかし現在は、産業界(供給側)の観点に多くの人が流されている。日本には、着物という世界に誇りうる伝統を持っているにもかかわらず、衰退の一途をたどっている。一方、欧米ブランド製品の売上高の3分の1は日本女性が占めるが、しかし、男性は黒か灰色の背広姿が大半であるという現実。又、肌にやさしくあるべきはずの肌着が化学物質でこどもの身体を痛めつける状況もある。日本女性のほとんどは、既に有り余る衣服を持ちつつ、一方で、他国の1ドル以下の生活を強いられる人々への関心が薄い。今後、基本的な役割と機能と、ひとり一人の「楽しみ」を確保するためには、どのようなあり方が望ましいのか。

分科会2「食べる」(食):

「食べる」行為は、(健全な精神を育むために)健康な身体をつくり、維持するための基本的な営みであるとともに、家族や友人・知人と共に「食べる」という行為は、楽しみや安らぎ等、人間性の重要な部分に関わる行為でもある。特に、子どもや高齢者にとって特別な意味をもっている。成長中の子どもにとっては母親と父親等大人と共に「食べる」行為は、愛情や心を交換し育み、社会生活を学習する機会である。

健康な食生活とは、適切なエネルギー量、バランスのとれた栄養、規則的な食生活の三つが基本である。しかし、短期間に経済成長最優先の価値観で進んできた日本社会では、現在、三食の崩壊、食卓の崩壊、食のマネジメント(家族の誰かが全体を見てバランスをとること)が壊れ、健康な食生活が壊れている。

経済成長が急激に達成されたある時期から、汚れや菌等を考慮すべき「衛生的な食べ物」への配慮から、「食」の工業化に伴って、化学物質汚染等を考慮すべき「安全な食べ物」へと変化してきている。一方、稲の青刈り政策をとりながら、国内の食糧自給率の低下と、海外に生産を依存する現在の持続不可能なシステムが存在する。国内では大量の食べ物が捨てられている一方、海外には、飢餓や栄養失調に苦しむ人々が億の単位で存在する。

このような現状において、「食べる」という基本的な役割と機能を確保しつつ、安全で持続可能な食のあり方へと、食べる側と作る側の双方が、どのように変わっていくのが望ましいのか。

分科会3「住む」(住):

「住む」行為は、単に雨露をしのぎ眠る場所の役割だけではなく、人間として生きるために非常に重要な場である。大人にとっては、社会的な役割を果たした後に、自分を取り戻す私的な時間を持つ場であり、愛を育む場である。子どもにとってこの場所は、守られる場であり、身体を育てる場であり、魂を宿す場であり、人間社会で生きてゆくための規律を学ぶ場である。このような重要な役割を秘めているにもかかわらず、現在の多くの日本の住まいは、この基本的な役割を考慮して設計され建てられてはいない。社会の共有の財産としての視点や、建てる側の権利とともに、近隣の側からの権利という両側面の視点で、住まいが建てられていない。周辺の自然と文化環境とを配慮したものでもない。

日本の住まいの貧しさは、大量生産・大量消費、大量廃棄の産業構造に組み込まれ、生活者として『住まい』を利用していない人の視点で住まいが設計され販売されている。

省エネルギー、省資源の視点から、夏涼しく冬暖かい住まいづくりは十分になされていない。更に、悪影響を及ぼす可能性を秘めた化学物質が住宅建材に含まれる一方、国内で戦後植林された森林が未成熟であったために、海外の森林を伐採し輸入することで対応してきた結果、国内外で問題が生じている。国内の林業が衰退してきており、森林の質の劣化

が起きている。他国の熱帯林や温帯林の伐採は、生物の多様性を消失させ、そこで生活する人々を圧迫してきている。安価な木材は、耐久年数の少ない安普請の住宅となって、資源の無駄となりやすい。今後、どのような方向をめざして、どのようにして、使う側と供給する側が変わっていけばよいのか。

分科会 4 : 「助け合い、育み合い、学び合い、遊び、憩い、競い、働き、移動し、人間同士が生きる場」(生活圏)

「生活圏」この分野は、特に、日本ではこれから、新たに創造してゆく大きな可能性を秘めた重要な分野である。人間が、一人では、或いは家族のみでは生きていけない社会的存在であるが故に、「公共性」をどのように考え、どのような役割を求め、どのような施設を求めるのか、という問いに関連する分野である。

1月27日(日)

・ 全体会合 2 午前 9:30 - 12:00

- 1 **分科会の報告と意見交換** 15分×4分科会
各分科会の報告を基礎にして、「望ましい暮らし像」の原型のようなものを描きだすこと、
それを貫く基本的な「生き方」の価値観が浮かび上がってくるような議論とともに、それを可能とする制度や構造のあり方を検討するための今後の方向について議論する。
- 2 **今後の行動計画に関する意見交換**
 - ワークショップ成果の整理の仕方と発表の仕方
組織案と今後の作業・行動計画案
- 3 **まとめ (実行委員・事務局)**

開催趣旨

「暮らし未来像を考え実行する活動」実行委員・スタッフを代表して
黒坂三和子

ご参加の皆様へ

現在、日本の各分野や各地において、日本の自然環境や歴史・文化に深い関心を持ち、世界と日本の経済活動が引き起こしてきた問題を憂い、自然資源と環境の限界等を十分に理解しつつ、私たち未来の望ましい暮らし方（衣食住・生活圏）を求めて、先駆的に自ら展開している専門家、実践家、活動家などの皆様に集まっています。

在る意味で、ここには、日本における良識と知性と心が、未来を描くために集ってきているともいえるのではないのでしょうか。

ここに集まってくださいました皆様、ここには来られませんでした呼びかけに答えてくださいました方々はともに、20世紀の最後の世代として、また、21世紀の最初の世代である共通の時代認識と責任感を、共有していることも事実ではないでしょうか。

今から、明日の昼まで、ご一緒に、22世紀も見据えて、私たちの願いを未来に繋げるための基礎づくりの作業を始めたいと思います。

どうぞ、ご協力をよろしくお願いいたします。

Ⅰ. ワークショップ目的

1. - 全体会合第1日目の目的

1) 問題意識の共有：分科会での議論を深めるために

私たちの現在の地球の資源の量と環境の質の限界を考慮しない過剰な消費生活を総合的に変革するために、「暮らしー生活基盤（衣食住）と生活圏」に関する理論的な整理を総合的に行うために、ここでは、3つの視点から現在の問題を意見交換する。

- * 極端な工業化とグローバル化の過程で、生産（労働）と消費（生活）のつながりが見えなくなり壊れてきている。
「人與人との関係の崩れ」
- * 日本社会を特徴づける地方文化等も自然環境の破壊とともに失われて

きている。

「人と文化(社会)との関係の崩れ」

- * 地球規模の資源の量と、環境の質の限界に近くまで人間の経済活動が迫っており、地球の生命維持能力が危い状態にまでなっている。

「人と自然との関係の崩れ」

しかし、どのように変革或いは改善したらよいのか、
未だ総合的で根本的なアプローチを誰も行ってきていない。

今回のワークショップは、

最初の実験的試みであるため、漠然とした部分が違って、当然。

最初から完璧を求めない。

- 専門性と様々な経験を持つ方々に参加いただいているので、この機会に、是非、皆様の想像力と創造性を発揮して、一緒に考え、創り出す作業をしていただきたいこと。ワーク(働く)会合にしたい。
歴史的に振り返りながら、現在生じている問題を幅広く挙げながら、分科会での鍵となる切り口を整理し、分科会での詳細な議論につなげたい。

2 - 各分科会で議論されることが望まれる議題と成果：

即ち「**くらし未来像の実践知恵袋**」の中身を詰める作業

- 各分科会での議論によって浮かび上がってくる望ましい未来像
(- 議論を整理することで、生じている問題と課題)
- 各分科会の専門家や実践家のリストと
その方々の実績や成果のリスト
- 望ましい未来像を実現してゆくためには
 - * 個人や家族でできることは何か。
 - * 生活圏や地域の協力でできることは何か。
 - * 産業や企業が出来るとは何か。
 - * 行政でできることは何か
 - * 政治家ができることは何か
- 今後、分科会としてできることは何か。
- 今後、「くらし未来像」全体としてできることは何か。

3 - 全体会合第2日目の目的

- * 各分科会での議論の内容と成果の共有
- * 全員で各分科会から出てくる未来像を重ねて得られる総合的な「くらし未来像」案

- * 今後の活動の方向
 - ワークショップの記録を整理し、報告書を作成。
 - * 普及用の書籍
 - * ビデオ作成等も検討に必要有り。

 - 「くらし未来像の実践知恵袋」の仕組みづくり

 - 実践し変化をおこすためには何ができるのか、
 - * 賛同者(著名人を含めて)を募り、書籍や広告を出して、広く呼びかけて、ネットワークを広げつつ、
 - * 首相、各大臣に提出
 - * 行政機関との政策対話

 - 海外との交流
 - * 東アジア地域や欧米との交流・連携
 - * WSSD(リオ+10年の国連会議)との連携

II - 背景

一人一人が生きるとは、自らの「命」を維持するために、また存在を確かめるために、働き、学び、考え、遊び、そして、パートナーと出会い子どもを生き育て、或いは、別な形で次の世代を育て、未来に繋げることでもあります。そのような営みを支えるのは、昔から変わらない毎日の基本的な生活でもあります。一人一人が生き生きと生きるためには、『生きがい』も必要ですが、同時に、健全な身体をつくる食べ物、身体を守りその人らしさを表現する衣服、心を安らげ健全な精神育む住み処も、同様に必要です。そして、それらの単位(家族)がそれぞれの願いをより有効に達成できるように集まり支え合い協力し合うための生活圏もまた重要です。

このように私たちは、個人或いは家族として、多様なつながりの中で、バランスを保ちながら毎日を過ごしてきています。しかし、第二次世界大戦敗戦後から今まで、経済成長を最優先とする日本の社会では、「暮らし」さえもが、細分化、分断化、分業化の影響を受けて、暮らしのあらゆる側面のほつれが激しくなっています。私たちを支える生活基盤と生活圏が急速に壊されてきました。その悪影響が、子どもたちや高齢者、そして、働き盛りの人々にも顕著に出てきています。人々の心の不安定化、身体の不健康、そして、水や食糧等の資源や環境の問題を引き起こしています。未来に向けて、今までの問題を真摯に振り返り、日本が築いてきた衣食住の素晴らしい側面を生かしつつ、地球規模の課題を視野に入れて、私たちの21世紀の「暮らしのあり方」を創造し、実践してゆく時ではないでしょうか。

日本においては1990年代後半から、様々な分野とレベルにおける既存の組織や構造を改革する動きが大きな流れとなっています。1945年の敗戦後の焦土から工業化社会への転換に伴って起こった右肩上がりの急激な経済成長量の拡大化の過程で形成された仕組みや法律・制度は、現在の「生活の質の向上を求める」人々の要求や「自然や環境を大切にす社会」を望む声に対して、有効でなかったり障害となったりしている場合が多いようです。

又、私たちの毎日の「暮らし」においても、家庭のゴミや産業廃棄物問題、環境ホルモンや化学物質問題、温暖化問題等の観点からも、ライフスタイルの見直しが強調されるようになってきています。しかし、「どのようなライフスタイルに変えればいいのか？」という問いに対して、部分的に行われ始めているが、総合的に、トータルに答えられる状況には至っていないのではないのでしょうか。

従って、今後どのような「暮らし方」をすることが、生活基盤(衣食住)・生活圏の本来の役割や機能を確保しつつ、資源や環境を考慮することになるのか、という問いに十分に答えることが出来るような、全体的な知識と経験と知恵の整理を行う必要があると考えます。

また、望ましい「暮らし」を実践する場合に障害となる法律や制度や構造をどのように変えていくべきか等を検討・分析し、代替案を提案することも求められています。

さらに、現在、同様の問題意識を持つ人々は、どのような人々なのか、実際にどのように取り組んでいるのか等を把握し、その知識と経験と知恵を、他の分野で取り組んでいる人々と分かち合い、協働することにより、より高い効果を促すような動きを支援する仕組み(知恵袋)が必要ではないかと考えます。

このような考え方を背景にして、今回のワークショップ「暮らしの未来像」の開催を計画しました。

特に、次のような3つの視点から、「21世紀型の暮らし方」を描き実践する活動

を様々な側面から支援する知恵袋（シンク＆ドゥ・タンク）」の必要性を認識していません。

1) 生活者として、生産と消費のつながりとバランスの観点から

私たち一般の大人は、生きる者（生活者）として、生産者（社会の一員として働く者）と消費者（生産物をいろいろな目的のために使う者）の両側面をもっています。しかし、急激な工業社会化の過程で、また経済のグローバル化の中で、極端な分業化や細分化によって、ひとり一人の日常生活の中で行われる「生産と消費」の「つながり」が見えなくなり、都市においてはその両者の「バランス」を保つことが殆ど不可能となってきました。それを改善するための情報も手段も対策も持たないまま現在に至っています。

更に、分業化された生産者は、供給者としての極端な思考論理にのみ立って生産物を製造し販売する事になった結果、生活者のつながりとバランスに関する視点は、壮年の男女ばかりでなく、子どもを育てる側や高齢者自身や彼らを介護する側の立場から、又、身体障害者等の立場からも、議論され検討されることは多くないのが現状ではないでしょうか。

現在の多くの法律や条令は、既存の縦割り行政の仕組みから、また、右肩上がりの経済成長による量の拡大を前提にした思考で作成されたものです。従って、現在の多くの法律や条令は、「生活者」の視点とから「消費者と生産者」のつながりとバランスのとり方を支援するようには出来ていません。

これからは、一人一人が生産と消費の適切なバランスを保つことができるような情報や技術や制度を、トータルな「暮らし（生活基盤と生活圏）」の視点から整理する必要があると考えます。

2) 文化・社会を特徴付ける基礎（生活基盤と生活圏）を創造的に再生するという観点から

1991年現在、世界の人口の20%（=先進工業国）が、世界のGNPの約85%、世界貿易の84%、国内貯蓄の85%、国内投資の85%を占めているといわれます。

（『UNDP 人間開発報告書』1994）

日本は、この20%の中に属しており、米国に次いで経済大国と言われるようになり、ODAも世界最大国となつますが、一方で、国と地方を合わせた借金の総額が約660兆円となっています。

『日本の豊かさのむなしさ The Emptiness of Japanese Affluence』（ガバン・マ

ーコック、みすず書房）の著者が指摘するように、「20世紀資本主義の勝利の不確実性が、日本ほど鮮明に露出しているところもないが、その不確実性が日本ほど理

解されていないところもない」状態のようです。

社会的責任を担う大人たちの荒廃、即ち、政治、行政、立法、企業、教育現場のどこをみても個人的な利益のためにその立場と力を利用している大人たちの状況が顕著になってきています。その大人の背中をみて育つ子どもたちは、学ぶこと、生きることの意味を見いだせないようです。日本の中高校生の6割は21世紀に希望が持てず、人生目標を、「楽しんで生きること」を一番に考えているという調査結果がでています。（「新千年生活と意識に関する国際比較調査」2001、日本青少年研究所）更に、教育現場の荒廃とともに、青少年犯罪の数と残虐さの増大、若い十代の女子の性の乱れ等の、現状を知れば知るほど、一人の大人として胸痛むものを感じます。

現在の子どもや若者は、未来の大人でもあります。私たちは今、一人の人間として、日本人として、大人として、未来責任を果たさなければならないと考えております。

3) 地球規模の資源の量と環境の質に限界の観点から

世界経済のグローバル化、自然資源を採取し工業化の大量生産、大量消費、大量廃棄の産業構造、工業化によって排出される化学物質の汚染、エネルギー使用の仕方（電気、車など）が拡大した生活様式が破壊的に変化したことなどに起因して、地球規模での資源を枯渇し環境の質を低下してきています。

地球の生命維持能力の低下：きれいな水、安定した気候、エネルギー、食用穀物などを生み出す生態系に人間の生活は依存していますが、現在のような経済活動のあり方を続けていけば、生態系の能力はほぼ確実に低下していき、取り返しのつかない損失を与えることになるようです。（WRR2000-2001）

従って、全人類が欧米人や日本人のような生活をするに地球があと二つ必要（WWW International Report 2000.10.20）といわれるようになりました。

一方、途上国の状態は、

- * 世界の栄養不足人口が2000年現在8億2600万人（FAO世界の食料不安情勢2000）
- ・ 世界の24億人（＝途上国の半分の人口）は下水同等の衛生的な水道システムの恩恵を受けておらず、11億人は家庭で上下水道の供給を受けていない（WHO&UNICEF世界の生活水事情2000）
- ・ したがって、毎日の食料・燃料を直接生態系に依存せざるを得ない

このように、全人類は、生態系に対する大規模で不可逆な影響を回避する方法を探る時代に直面しています。

工業先進国にいるわれわれ日本人は消費者として、あるいは企業人として、様々

な意思決定をしています、それは生態系の運命を左右する意思決定もしていることになるようです。

このように、「暮らし」多様な未来像を描き実践してゆくことは、

- * **工業社会における供給側からの目的で生産されたものを人々に押し付けるあり方から、使い側、需要サイドからの要求に生産者側が対応するというあり方に移行することになり、**
- * **縦割りの縄張り思考から出来ていた法律や条約を、一人一人が生き生きと生きるためのトータルな横のつながりの生活を支えるための法律や条約へと移行することであり、**
- * **食や住や衣服や生活の仕方等で誇りえる日本の文化的・社会的資産を再生/創造することであり、地方の自然の多様性/地方文化の多様性を育むことであり、**
- * **日本の国際性と独自性の両立を目指すことにつながり、**
- * **さらには、人類の安全保障を守り、地球資源と環境の安全保障をまもることにつながっている**

と、考えております。

皆様とのこれからの協働作業は、日本の今後の100年、200年を見据えたものであり、今回のワークショップで終了するものでもなく、過去と未来とを繋ぎながら継続されてゆくものでもあります。真摯な姿勢ではあっても、個々人の創造性と想像力を刺激し合うような楽しいものにしてゆきたいと願っております。

パネリスト、コーディネーター、話題提供者 プロフィール

今回のワークショップにおける議論においては
発言者の年齢は特に背景条件として非常に重要だと認識し明記してあります。

1. 全体会合Ⅰ：パネリスト

* 江戸京子（えど きょうこ）

ピアニスト・アリオン音楽財団 理事長

1937年東京生まれ。1955年桐朋学園ピアノ科卒業後、フランス政府より後援学生として渡仏、パリ国立音楽院入学。1960年同音楽院卒業後渡米し、シカゴ交響楽団と共演、以後アメリカやヨーロッパ、日本の各地で演奏活動を行う。

1979年、「演奏家と聴衆の心が通いあう音楽会」を目指し、室内楽鑑賞会の「ムジカ・クラブ」を主宰。1985年より毎年「東京の夏」音楽祭を企画、構成。同年、財団法人アリオン音楽財団を設立し、理事長に就任。「東京の夏」音楽祭のほか、作家や学者のレクチャーを組み合わせ合わせたコンサート、夜の外出が難しい人のための昼間コンサートの企画、若手音楽家育成のためのアリオン賞の制定と受賞者の長期的な支援、地方ホールの自主事業のサポート、海外の文化支援など多方面に渡って活動を続けている。

各国の音楽コンクールにも数多く招かれており、1986年のチャイコフスキー・ピアノ・コンクールをはじめ、1991年ジョージ・エネスコ国際音楽コンクール（ルーマニア）、1992年ロン・ティボー国際コンクール（フランス）、1995年日本国際音楽コンクール、2001年ジュネーブ国際コンクール（スイス）等多くの国際コンクールの審査員を務める。文化庁「文化政策推進会議」委員、三井海上文化財団理事、朝日新聞文化財団評議員等多くの文化活動団体の役員を務める。

1993年京都音楽賞特別賞受賞。1998年フランス政府から「芸術文化勲章オフィシエ」を授与される。1999年「平成10年都民文化栄誉章」受章。1999年久慈市アンバーホール館長（芸術監督）となる。

アリオン音楽財団 <http://www.arion-edo.org>

* 鬼頭秀一（きとう しゅういち）

農工大学大学院農学研究科（共生持続社会学） 教授

1951年名古屋生まれ。薬学部で分子生物学を志したが博士課程を中退、科学史・科学哲学に転向。博士課程単位取得退学。現代の生命科学に関する科学史・科学社会学を研究していたが、1990年代から欧米の環境倫理学の批判的検討を始め、その後、非西洋社会にも射程を持った学際的で関係論的視座を持った環境倫理学の構築をめざす。大学入学前後から関心を持ちつ

づけていた水俣病などの公害問題と自然保護などの環境問題を共通に論じられる理論的枠組を、現場を踏まえた上で構築しようとしている。山口大学教員時代に同僚から学んだ民俗学や文化人類学の手法を参考にしつつ、青森公立大学の教員時代には白神山地の保護管理の問題に取り組み、周辺の地域を社会的、文化人類学的なアプローチで歩き、環境倫理的な視点で探求し、『自然保護を問いなおす - 環境倫理とネットワーク』(ちくま新書、1996年)を上梓した。その後、奄美大島、諫早湾、霞ヶ浦、沖縄、三富新田(所沢)などの現場を歩きつつ、農林漁業などの生業や遊びなどを通じた自然とのかかわりのあり方を中心的な課題として、人間の生のあり方の根源を考察している。著書は他に、『環境の豊かさをもとめて - 理念と運動』(講座人間と環境 第12巻、責任編集、昭和堂、1999年)、『ローカルな思想を創る』と『市場経済を組み替える』(共著)(農文協、1998、1999年)など。

*** 黒田杏子 (くろだ ももこ) = 俳号芥**

俳人、藍生俳句会 主宰

1938年東京生まれ。父の郷里栃木県那須地方に疎開。高校卒業まで栃木県で暮す。東京女子大在学中より山口青邨(せいりん)に師事。心理学科卒業後、(株)博報堂入社。消費者教育、テレビ・ラジオ番組プランナー、「広告」編集長などを経て、調査役として定年退職。句作は30才を直前にして再開。第一句集「木の椅子」で俳人協会新人賞、現代俳句女流賞同時受賞。第三句集「一木一草」で俳人協会賞。会社員と俳人二足のわらじで、在職中より、NHK教育TV「NHK俳壇」主宰、日経新聞俳壇選者などをつとめ、現在も「BS俳句王国」をはじめ、NHKラジオなどにたびたび出演。NHKTV「四国八十八か所のレポーター」、「おくのほそ道」のラジオエッセイなどでも広く知られる。現在、<俳句列島日本すみずみ吟遊>をすすめ、日本の津々浦々を歩き続けている。

1992年より俳誌「藍生」(あおい)創刊主宰、全都道府県に千人近い自主参加の会員がいる。エッセイストとしても知られ、各新聞、雑誌に常に文章を発表。1982年よりきもの研究家大塚末子デザインによる独自のコスチュームで、日本の伝統的テキスタイルを生かしてきた。この十年はシルクロードやアジアでの布地も積極的に着ている。「季語の現場人」を行動の指針として、自分の頭と手と足を通した体験をつみ重ねている。

「二十世紀の後半を広告会社で働いてきたことが、二十一世紀のフリーランスの俳人という自分の生き方を反面教師のように、オリジナルなものにしてくれている」と感じている。

*** 香西泰 (こうさい・ゆたか)**

(社)日本経済研究センター 会長、東洋英和女学院大学 教授

1933年生。経済企画庁入庁、スタンフォード大学留学、調整局産業経済課長、物価局物価調整課長、経済研究所総括主任研究官等歴任。1981-87年東京工業大学教授。1987-97年社団法人日本経済研究センター理事長、1997年より現職。主な著訳書:『高度成長の時代』(日本評論社、1981)、『レーガノミックス』(ニスカネン著、日本経済新聞社、1989年)、『市場の倫理 統治の倫理』(J.ジェイコブ、日本経済新聞社、1989年)、『経済の本質 自然か

ら学ぶ』(J.ジェイコブ、日本経済新聞社、2001年)

*** 小林料(こばやし・おさむ)**

(株)東京電力 顧問

1927年京都市生まれ。1952年京都大学工学部土木工学科卒、同年に東京電力に入社し、水力、火力の現場、建設部、技術部、企画室を経て、1968年東京電力が他の企業に先駆けて創設した「公害総合本部」の初代総括課長。以後、一貫して電気事業の公害、環境対策に従事。1979年環境部長。1983年以降、理事、立地環境本部副本部長、立地環境本部副本部長兼技術開発本部副本部長。1995年理事退任、顧問就任、現在に至る。この間、外務省、大蔵省、通産省、環境庁、経団連、電事連等の各種委員会委員を歴任。1988年東京都知事表彰、1989年環境庁長官表彰、1994年国連環境開発(UNEP)よりGLOBAL500賞授賞(日本の産業界では二人目)

現在、(財)日本野鳥の会専務理事、(社)日本環境教育フォーラム理事、(社)海外環境協力センター理事、(社)日本ナショナルトラスト協会評議員、環境カウンセラー全国連合会顧問、毎日新聞持続可能な社会創造委員会委員、持続可能な開発のための評議会(JCSD)顧問、その他、多くの環境関係NGOに関与。

*** 役重真喜子(やくしげ まきこ)**

岩手県東和町役場総務課いきいきまちづくり推進室長、畜産家

1967年茨城県生まれ。平成元年東京大学法学部卒業後、農林水産省入省。1988年岩手県東和町役場へ出向、畜産と農家の暮らしに魅せられる。1990年農水省を退職、東和町役場に正式採用。同町農林課男女共生のまちづくり推進室長、総務課いきいきまちづくり推進室長として子育て支援、環境政策等を担当。一貫して「農」の現場から、地域に根ざした食や子育てのあり方等に対し発言を続ける。著書に「ヨメより先に牛(べこ)がきた」(家の光協会)。

<全体会議趣旨説明>

*** 足立治郎(あだち じろう)**

「環境・持続社会」研究センター(JACSES)事務局長代行

1967年東京生まれ。学生時代に、日本に住んでいる「自分」の生活と途上国の環境・人権問題のつながりに「憤り」を感じている時、「資金的基盤もない」大変な状況でそうした問題に取り組む「日本のNGO」に「これは本物!」と共感を抱き、ボランティアを始める。その後、日本の企業の環境問題への関わり/取りくみに関する調査を学生仲間と2年間渡り行い、「環太郎の会社のここが知りたい! ぼくたちのエコロジー就職宣言」(共著、ダイヤモンド社、1992年)を出版。大学卒業後、環境問題に対する責任をもつ1企業人として、よい商品を消費者に提

供しながら、企業を中から改善していくことを目指して、東レ株式会社に入社。人事部および営業部にて良き同僚 / 上司と楽しく仕事をしていたが、(昨年のテロに象徴されるような) 深刻化する社会 / 環境問題に早急に対応するには、企業行動 / 消費行動を変える / 後押しするための、市民・NGO の活動の強化と政策の早急な転換 / 実施が必須であることを実感し、退社。政策提言型の NGO である「環境・持続社会」研究センター (JACSES) に入所し、7 年目を迎える。現在は、特に、ODA・税制・財政改革に取り組んでおり、なかでも、「地球温暖化に対処するための税制・財政改革実現」に尽力中。著書に、「環境容量の研究・試算」(共著、JACSES、1999 年)、「地球の限界」(共著、日科技連出版社、1999 年)、「税制・財政を環境の視点で考える」(編著、JACSES、2000 年) など。横浜国立大学教育人間科学部「持続可能な発展論」非常勤講師など。

*** 藤崎理恵 (ふじさき りえ)**

東京大学大学院工学系研究科修士課程 1 年

1978 年栃木県足利市という人口 17 万人のまちに生まれ、小・中・高と地元でのんびりと過ごした。小学生高学年の頃 (1990 年頃) に、地球温暖化やオゾン層破壊、熱帯林破壊の話を知り、そしてそれが自分や家族、友人の何気ない生活によって引き起こされることを知り、悪気はなくても人間の存在自体が悪であるかもしれない、という考えにショックを受けた。それでも、周りの大好きな人々を見ていると、そのような考え方はどうしても受け入れられず、制度や技術が悪いに違いない、それがちゃんと直ればきっとだいじょうぶ、と勝手に決め込み、自分は将来そのために働こうと決意した。大学で東京に出てきて、以前から関心のあった環境問題について勉強、活動をはじめた。

現在、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程にて、中心市街地において 住民の主体的かつ無理のない地球環境保護活動をいかに進めていくかをメインテーマ におきつつ、そのために研究者ができることとして評価手法を研究している。(修論テーマ (仮) : 商店組合の主体的な環境活動のプロジェクト評価)

都市工学専攻都市環境工学講座 <http://www.env.t.u-tokyo.ac.jp/hanakilab/>

東京大学環境三四郎 <http://www.sanshiro.ne.jp/>

< 特別参加 >

*** 永井多恵子**

ジャーナリスト、世田谷文化生活情報センター (公共劇場 + 生活工房) 館長

NHK で、生活経済番組のキャスターとして活躍した後、1980 年文教・女性問題・生活経済担当の解説委員。この間、女性初の放送局長 (埼玉県) として都市近郊問題をテーマに、ドキュメンタリー・ドラマを製作。95 年 NHK 解説主幹。埼玉芸術劇場、東京演劇フェア、横浜アートウェブなどの企画委員を経て、97 年から世田谷文化生活情報センター館長。生活工房で、

ユニバーサル、環境にやさしい「くらしのデザイン事業」を開始、シンポジウム、展示、レクチュア、ワークショップなどの手法で次世代の暮らし方を提案している。主なテレビ番組製作『芸術の園をどう耕すのか』、『荒れる教室－アメリカの対応』、『大規模スーパーの神話』、著書『21世紀の家族像』（NHK出版共著）、論文『次世代のデザイン』、『環境保全に行動する女性たち』など多数、目下、月刊誌「改革者」に連載中。

*** 谷みどり**

内閣官房副長官補付参事官

1955年広島生まれ。1979年東京大学経済学部卒業。在学中は、文化祭で女子学生だけの「ベルバラ」を企画し、脚本、演出を担当。東大生協では学生委員長を務める。その後、通産省に入省し、経済協力、エネルギー需給見通し、電源立地、中小企業対策を担当。1986年米国スタンフォード大学政治学修士。その後通産省で物価対策、技術開発、国際エネルギー関係等を担当。1994年版通商白書（副題は、「企業が国境を越えて動く時、日本はどう生きるか」）の担当室長。1996・99年、パリにある国際エネルギー機関に勤務し、各国のエネルギー政策を審査。その後通産省に戻り、京都議定書関係の交渉（COP5、COP6）、2001年から内閣官房参事官として国際関係を担当。

*** 一方井誠治**

：環境省地球環境局地球温暖化防止国民生活推進室 室長代理

1951年東京生まれ。大学では経済学を学び75年に環境庁に入る。東京の郊外で育ち、高度経済成長期に雑木林や原っぱなど、自分にとって大事な幸福の源泉だった身の回りの環境がいとまやすく喪失・劣化していったことへの危機感が環境行政を志した一つの動機。環境白書を作成する計画調査室長、環境基本計画を担当する環境計画課長、環境基準や健全な水循環などにかかわる水質管理課長、地球環境問題を担当する地球環境部企画課長などを経て、現在、大臣官房政策評価広報課長。昨年11月から、21世紀の新たなライフスタイルを皆で考え推進していくための地球温暖化防止国民生活推進室室長代理を兼務。この間富山県及び米国の日本大使館でそれぞれ3年間勤務。最近、自宅の庭で手作りした雨水利用のミニ・ビオトープを観察するのが楽しみの一つ。

2. 分科会：コーディネーター・話題提供者

分科会1「着る」(衣)

*** 三輪倫子(みわ ともこ)**

消費生活コンサルタント、リファッションアドバイザー

1945年東京生まれ。ここ20年間、装うことは自らの個性の表現という観点から、「衣と装い」について考え、活動してきた。「装う」ことは人間らしさの証であり、何を着るかはその人

のゆとり、喜び、楽しみ、悲しみなどの表現であり、人間らしい創造的な行為である。しかし「装い」の世界は、時代とともに変化する流行にのせられてきた。その結果、大量の衣料品を抱え込み、捨てるに捨てられず「ものがたくさんある不幸せ」という状態になった。ここしばらくは「ものを活かす」ではなく「ものをよりよく捨てる」ことを考えなければならない。「リサイクル」ができるということが、安心して今までより多くの不要品の生産を進めることになりかねない。私は衣類のリフォームをすることによって使い切ることを提案している。タンスの中で眠っている衣類にもう一度光をあてて、自分の技術で、自分ブランドの服を創造し、自分や家族で装う。この一連の行為をリファッションと名付けた。衣類は本来長寿なのである。一つの衣類をどれだけ長く使ったか、を自慢できるような社会的価値観を創りたい。

【活動歴】 1980年、板橋区消費者センターリフォーム講座講師。以後毎年「リフォームファッションショー」開催。東京都、島根県での『豊かな装いをめざして』シンポジウム・パネリスト。江戸川区、東村山市、越谷市、草加市などでリファッション講座開催。板橋区寿大学「暮らしと装い」科、文京区区民大学「リファッション入門・私ブランドを作る」講師など。1997年スリランカで「布のリサイクル・リフォーム活動」講座開催。1997年ベトナムで「マングローブ地域に住む女性による環境問題と生活改善について」日本側発表者。2000年中国、河北大学「地域から作るあしたの地球環境・実践編 - 衣料品からの取り組み」講師。2001年モンゴルで「リファッション」ワークショップ開催。

【著書・連載】『高齢者のためのリフォーム』1994年（財）日本消費者協会発行。『もう一度おしゃれに・リファッション』1999年 窓社。『おしゃれしませんか』雑誌「お達者で」連載。『ミワトモコのリファッション』雑誌「百歳万歳」連載。『オリジナルグッズ』雑誌「エール」連載など。

分科会2「食べる」(食)

* 山本加津子(やまもと かつこ)

主婦の友社『ゆうゆう』 編集長

「編集記者歴30年」などと書くと、その道のプロと思われがちですが、食も、環境も全くの素人です。ただ、一般誌を作りつづけて、生活者感覚、主婦感覚でものを見つづけてきました。どこか心の琴線に触れるところがなければ、お金を出して情報(雑誌)を買う、つまり、読者を獲得するという行為が成り立たないからです。専門家の方々が揃う中で、タテマエではない、ホンネの、一般ピープルとしての「暮らし方モデル」が模索できればと、参加させていただくことになりました。形の上では「共働き主婦・母」ですが、最近の実態は、家でほとんど夕食をすることがない働きバチ。外食の毎日に危機を感じています。早稲田大学卒業後、ニッポン放送アナウンサーを経て、出産後、主婦の友社入社。雑誌「主婦の友」「わたしの赤ちゃん」「健康」などで、育児、教育、健康をはじめ暮らしや生き方全般を担当。昨年10月に50代女性誌『ゆうゆう』を月刊誌として創刊。日本ヒーブ協議会第13期会長。リーダーシップ111メンバー。

*** 山崎洋子 (やまざき ようこ)**

福井県三国町の肉牛農家

1948年生まれ。元音楽関係のサラリーマンだったところを結婚で就農。全国の農家のお母さんたちをネットワークして「田舎のヒロインわくわくネットワーク」を作り、シンポジウムの開催等活躍していらっしゃいます。最近では雪印の問題、狂牛病問題等で盛んに発言。著書：「田舎のヒロイン日記」「おけら牧場：生きものたちとの日々」(ともに家の光協会)等。

*** 藤田和芳 (ふじた かずよし)**

産直団体「大地を守る会」(会員数約4万人)代表

消費者グループ「らでいっしゅぼーや」も運営。有機無農薬の生産農家を支援。産直と共同購入、産地との交流、岩手県山形村の岩手短角牛(黒毛和種と違い、山で育つ自然志向の牛)の支援に取り組む。

*** 安藤カーキー (あんどう カーキー)**

TVディレクター、カーキー事務所 代表

1951香川県生。農業および環境をテーマにドキュメンタリー番組を制作・演出。

1972広島大学哲学科中退。1978年 日本映画学校卒業。映画およびテレビドラマの助監督を経て、ドキュメンタリーのディレクターとなる。1995年 番組で山形県の農家を取材し農業に目覚める。1996年 (有)カーキー事務所を設立。URL <http://www.kaky.co.jp>

- 作品歴
- ‘95 「にっぽんの夫婦：農家の嫁と呼ばないで」NHK総合
 - ‘99 「素敵な宇宙船地球号：スーパーから有機が消える日」
「素敵な宇宙船地球号：手賀沼浄化大作戦」テレビ朝日
 - ‘00 「改正JAS法のすべて」日経ビデオ
 - ‘01 「素敵な宇宙船地球号：病める富士山を救え！」テレビ朝日
「キューバは有機農業の先進国」kakyビデオ

*** 菅原歎一 (すがわら かんいち)**

(株)リゾート通信社 代表取締役

1943年秋田県生まれ。出版社勤務の後、84年、タウン情報のデータベースを構築する(株)HAL情報サービス設立。90年、(株)リゾート通信社を設立し、全国の地域づくりの事例や、町おこしに取り組む人物を紹介する情報誌『かがり火』を発刊、現在に至る(年6回発行の隔月刊、編集長は森巖夫明海大学教授)。併せて95年、全国の地域づくり関係者400人の出資による地域交流居酒屋<新・浪漫亭>を東京の新宿区市谷柳町で開業。“亭主”に就任し、都市と地方の複合交流を推進している。

新しい社会を切り拓く行動は“変差値人間”でなければなし得ないと、現在、全国250人の“変差値人間”たちによる『かがり火ネットワーク』を組織する。

*** 中村靖彦（なかむら やすひこ）**

「良い食材を伝える会(会長・辰巳芳子)」主宰

宮城県仙台市出身。昭和34年東北大学文学部卒。同年NHKに入る。仙台、鶴岡の支局を経て、本部教育局農業部、解説委員室解説委員となる。この間、「明るい農村」などの農事番組、「ニュース解説」、「視点・論点」などの解説番組、さらにドキュメンタリー「豪雪地帯」、「鹿島」、「巨大開発」、にほんの条件「食料・地球は警告する」(ギャラクシー大賞受賞) NHK特集「200海里の衝撃」、「どうする日本農業」、「コメ・迫られる選択」などの特集番組を担当した。

平成13年3月、解説委員を退任。現在、明治大学および女子栄養大学客員教授。政府委員として、米価審議会、食料・農業・農村基本問題調査委員などを歴任。主な著書に「狂牛病 人類への警鐘」(岩波新書、最新刊)、「農林族」(文春新書)、「コンビニ・ファミレス・回転寿司」(文春新書)、「遺伝子組み替え食品を検証する」(NHK出版)、「農の理想、農の現実」(共著、ダイヤモンド社)、「日記が語る日本の農村」(中公新書)、「ブラウン管の証言」(農村漁村文化協会)などがある。

*** 真下 淑江（ましも よしえ）**

群馬県沼田市 市議

東京で生まれ、沼田で子育てをしながら、生協の設立に関わり、無農薬野菜の共同購入、環境問題、読み聞かせの活動などに取り組み、1991年、沼田市議となり、現在3期目。2年前から高崎経済大学地域政策 研究科に在籍、修士論文のテーマは、「大型公共事業の政策評価」～八ツ場ダムを実例にして～。

家族は、夫と4人の子ども。趣味は、読書と山歩き

分科会3「住む」(住)

*** 松井晴子（まつい はるこ）**

フリーランス編集者、松井編集室

1944年福島県(疎開先)生まれの東京下町育ち。建築専門家向けの月刊誌の編集を経て現在にいたる。人が「住む」ことを中心に、都市デザイン、まちづくり、建築、住宅、家具などをテーマに、単行本や雑誌の企画・編集・取材を「生業」にしている。昭和初期の和洋折衷木造住宅や、時を経て熟成したなにげない街並みに郷愁を感じつつ、現代に暮らす日本人のフツーの住まいや適度の品格をもった街並みに関心をもっている。大正生まれの母から躰られた「節約」の教えを最低限守る程度の暮らし方。

*** 西本和美（にしもと かずみ）**

住宅や建築が専門の編集者・ライター

1958年大分生まれの大分育ち。武蔵野美術大学短期生活デザイン学科および造形学部基礎デザイン学科の助手を経て、編集業に携わるようになる。日本の風土が育む住まいや暮らし、林業、職人の技術に関心を持っている。これまで専任で関わった雑誌は『CONFORT』（1～28号、建築資料研究所）、『チルチンびと』（1～12号、風土社）。現在、3月末に創刊する季刊誌『住む。』（泰文館発行、農文協発売）の創刊準備に追われる毎日。

* **長谷川 敬（はせがわ ひろし）**

建築家、「東京の木で家を作る会」理事、「緑の列島ネットワーク」代表

1937年東京生まれ。1964年京都大学大学院工学専修課程修了後、建築家パオロ・ソレリのアーコサンティ（アリゾナ州）に入り、アーコロジーの設計・建設に参加。1968年都市・建築設計研究所に入所。1974年長谷川敬アトリエを開設、現在に至る。個人住宅、「桜町病院聖ヨハネス・ホスピス」「聖ヨハネ・修道院」などの仕事がある。

主な論文に「人間の棲み家」（住宅建築 1986年3月号）、「自然と共生するエコロジーハウス」（「コンフォルト」1991年5月号）、「住まいの適正技術を考える」（「OMソーラーの家」1991年）、「住まいの適正技術その後」（「OMソーラーの家2」1991年）、「働く家」（「住宅建築」1995年1月号）共著「消費する家から働く家へ」（建築資料研究社 1996）

* **三澤文子（みさわ ふみこ）**

建築家、Ms 建築設計事務所主宰、岐阜県立森林文化アカデミー 教授

1956年静岡県生まれ。1979年奈良女子大学物理学科卒業。1980年大阪工業技術専門学校建築学科卒業。建築設計事務所勤務をへて、1985年、夫君と Ms 建築設計事務所設立。1995年木構造住宅研究所共同設立。木造住宅を中心に設計活動を続けている。主な著書に「住宅に空間力を」（彰国社 2001年）

* **富田玲子（とみた れいこ）**

建築家、象設計集団 代表

1938年東京生まれ。1963年東京大学工学部建築学科大学院修了。早稲田大学教授・吉阪隆正が主宰するU研究室勤務をへて、1971年大竹康一（故人）、樋口裕康とともに象設計集団設立。沖縄、台湾、北海道、などで、地域に根ざしたエコロジカルな公共建築を70年代始めから手がけている。人間の生理に基づいた心地よさを追求した独特の設計手法で、多くの示唆に富んだ住宅も設計している。

* **桑原次男（くわばら つぎお）**

クワバラ・パンボキン 専務取締役、建物の「こわし屋」

1946年生まれ。埼玉県与野市で育ち他を知らず。在学中より解体工事に携わる。解体から産業廃棄物処理作業まで幅広く活動。

分科会4「助け合い、育みあい、学び合い、遊び、憩い、働き、移動し、人間同士が生きる場」(生活圏)

*** 菅谷明子(すがや あきこ)**

ジャーナリスト、経済産業研究所 客員研究員

1963年北海道生まれ。米ニュース雑誌「ニューズウィーク」日本版スタッフを経て、現職。コロンビア大学大学院にて、国際関係論、メディア・ジャーナリズムを研究し修士課程了。約6年にわたりニューヨーク、ワシントンDCを拠点にメディアと市民社会、ジャーナリズム、コミュニケーション・テクノロジーなどをテーマに取材・研究活動を行い、2001年より東京在住。現在は、ジャーナリスト活動を続けるいっぽうで、東京大学非常勤講師としてメディア表現やジャーナリズム教育のフィールドで実践・研究活動を行うほか、武蔵野美術大学で「メディア・リテラシー」を担当。また、2001年7月より経済産業研究所・客員研究員としてメディアと市民社会のあり方を創造する「地域社会のコミュニケーションデザイン」プロジェクトをスタートさせた。主著に「メディア・リテラシー」(岩波新書)。

『くらし未来像を考え実行する活動』実行委員

*** 安藤 多恵子(あんど たえこ)**

市民エネルギー研究所 代表

70年代は水俣を始めとした公害問題や原発問題に、80年代は教育雑誌「ひと」(太郎次郎社)の編集委員として、主としていじめや不登校などの教育問題に取り組んでいたが、1986年のチェルノブイリ事故以後は、市民エネルギー研究所に入りエネルギー・原発・経済・環境の問題に関する活動をしている。

90年代からは、日本のエネルギー政策(長期エネルギー需給見通し)に対しての検証をし、原発なしでCO₂も削減できるという、私たちが考えるエネルギー需給見通しをシミュレーションするプロジェクトの一員となり後に代表となる。(市民エネルギー研究所編「2010年 日本エネルギー政策」を公表)

以後、バージョンアップを図りながら97年のCOP3、2001年4月には総合エネルギー調査会合同部会にて、大幅な新エネルギー導入や産業構造の転換等をすれば、ゼロ成長でも2020年までに原発を廃炉にできCO₂も削減できるという新たな政策提案をした。

*** 和田 幸子(わだ さちこ)**

富士ゼロックス(株) 監査室 マネージャー

1948年神奈川県生まれ。1971年早稲田大学理工学部応用化学科卒業後、富士ゼロックスに入社し、研究開発、経営品質推進、新規事業推進、人事教育などコーポレート・スタッフを経て、1994年に総合教育研究所に出向。1997年環境推進部に復帰し、環境フェア開催・環境報告書制作・環境教育を担当し、2001年監査役室で経営のお目付け役。

持続可能な社会形成として、ライフスタイルそのものの変革が求められ、行政・企業・市民がそれぞれのパートナーシップを発揮した実践の重要性を認識し、社会貢献活動を推奨する企業風土に支えられてくらし未来像ネットに参画。また、筑波大学社会人大学院カウンセリング専攻を2001年卒業し、キャリア・カウンセリング活動に参加し、消費(くらし)と生産(労働)を統合させたトータルライフスタイルを探求中。

ワークショップ参加者リスト（分科会別）

カテゴリー1	名前	タイトル
全体会議パネリスト	香西 泰	経済学者、(社)日本経済研究センター 会長、東洋英和女学院大学 教授
全体会議パネリスト	小林 料	(株)東京電力 顧問(エネルギー)
全体会議特別参加	一方井 誠治	環境省温暖化防止国民生活推進室 室長代理
全体会議特別参加	谷 みどり	内閣官房副長官補付参事官
全体会議特別参加	永井 多恵子	ジャーナリスト、世田谷文化生活情報センター館長
全体会議共同司会、趣旨説明	黒坂 三和子	「くらし未来像を考え実行する活動」 実行委員長
全体会議趣旨説明	藤崎 理恵	東大工学部大学院 修士2年
全体会議趣旨説明	足立 治郎	「環境・持続社会」研究センター(JACSES) 事務局長代行
全体会議共同司会	安藤 多恵子	市民エネルギー研究所 代表
全体会議参加者	末 正明	小石川後楽園庭園保存会 代表理事
全体会議参加者	堀内 行蔵	法政大学人間環境学部 教授、学部長
分科会1:衣・コーディネーター 全体会議パネリスト	黒田 杏子	俳人、藍生俳句会 主宰
分科会1:衣・話題提供者	三輪 倫子	消費生活コンサルタント、リファッションアドバイザー
分科会1:衣・話題提供者	上山 弘子	やまあい工房 代表、染色家
分科会1:衣・一般参加者	中岡 丈恵	NPO せっけんの街 理事、 リサイクルせっけん協会関東 全国幹事会幹事
分科会1:衣・一般参加者	今泉 雅勝	日本野蚕学会 委員、 (有)赤坂ビーイン 代表取締役
分科会1:衣・一般参加者	森谷 路子	日本生活協同組合連合会
分科会2:食・コーディネーター、全体 会議パネリスト	役重 真喜子	岩手県東和町役場総務課いきいきまちづくり推進室 室長、畜産家
分科会2:食・コーディネーター	山本 加津子	主婦の友社『ゆうゆう』 編集長

分科会2:食・話題提供者	山崎 洋子	田舎のヒロインわくわくネットワーク、肉牛農家
分科会2:食・話題提供者	藤田 和芳	産直団体「大地を守る会」 代表
分科会2:食・話題提供者	安藤 カーキー	TVディレクター、カーキー事務所 代表
分科会2:食・話題提供者	菅原 歆一	地域情報誌「かがり火」編集長、(株)リゾート通信社 代表取締役
分科会2:食・話題提供者	中村 靖彦	農政ジャーナリスト、明治大学 客員教授
分科会2:食・話題提供者	真下 淑恵	沼田市議会 議員
分科会2:食・一般参加者	高橋 保広	ネットワーク農縁 代表
分科会2:食・一般参加者	渡辺 美砂	グリーンコンシューマー研究会
分科会2:食・一般参加者	坂本 ゆかり	富士ゼロックス株式会社 エコロジー & セーフティ推進部
分科会2:食・一般参加者	興石 安奈	エコネット・美(ちゅら)
分科会2:食・一般参加者	能登 裕子	田舎のヒロインわくわくネットワーク
分科会2:食・一般参加者	大松 優子	田舎のヒロインわくわくネットワーク、 卵・米・野菜・自然食品店経営
分科会2:食・一般参加者	猪野 正子	田舎のヒロインわくわくネットワーク、 いちご・米・麦・そば専業農家
分科会2:食・一般参加者	原田 麻里子	Think the Earth プロジェクト
分科会2:食・一般参加者	石島 まり子	マダム石島(株)
分科会3:住・コーディネーター	松井 晴子	編集者:松井編集室
分科会3:住・コーディネーター	西本 和美	編集者:有限会社編集座
分科会3:住・話題提供者	長谷川 敬	建築家、「緑の列島ネットワーク」 代表、「東京の木で家を作る会」 理事、長谷川敬アトリエ
分科会3:住・話題提供者	富田 玲子	建築家、象設計集団
分科会3:住・話題提供者	三澤 文子	建築家、Ms 建築設計事務所 主宰、岐阜県立森林文化アカデミー 教授
分科会3:住・議論主要参加者	桑原 次男	クワバラ・パンバキン 専務取締役
分科会3:住・議論主要参加者	常山 泰弘	大工
分科会3:住・議論主要参加者	山崎 正代	生活クラブ生協ーレストラン山猫軒(自然食) 経営
分科会3:住・議論主要参加者	鈴木 洋子	健康な住まいを考える会 世話人・兵庫県建築工会神戸支部 副支部長
分科会3:住・一般参加者	小澤 紀美子	東京学芸大学 教授、工学博士、附属教育実践総合センター長
分科会3:住・一般参加者	大山 晶子	イー・アール・エム日本株式会社 研究員

分科会3:住・一般参加者	半田 真理子	(財)都市緑化技術開発機構 研究第二部長
分科会3:住・一般参加者	高橋 ユリカ	川辺川東京の会、ライター
分科会3:住・一般参加者	森井 雅子	NPO 法人「ぐらすかわさき」
分科会4:生活圏・コーディネーター、 全体会議パネリスト	江戸 京子	アリオン音楽財団 理事長、ピアニスト
分科会4:生活圏・コーディネーター、 全体会議パネリスト	鬼頭 秀一	東京農工大学 教授(環境倫理)
分科会4:生活圏・話題提供者	望月 真一	株式会社アトリエ U.D.I 都市設計研究所 代表取締役
分科会4:生活圏・話題提供者	菅谷 明子	ジャーナリスト、経済産業研究所 客員研究員
分科会4:生活圏・一般参加者	竹橋 直久	流通開発研究会 常任理事
分科会4:生活圏・一般参加者	江田 雅子	NPO法人ぐらす・かわさき
分科会4:生活圏・一般参加者	鈴木 達治郎	電力中央研究所 上席研究員、 慶応大学教授、ピースプレッジジャパン 代表
分科会4:生活圏・一般参加者	小林 和子	元中高校長
分科会4:生活圏・一般参加者	泉 耿介	都市環境計画研究所 代表
分科会4:生活圏・一般参加者	緑川 芳樹	グリーンコンシューマー研究会
分科会4:生活圏・一般参加者	橋本 晃和	国立政策研究大学院 大学教授
分科会4:生活圏・一般参加者	神野 智世子	経済産業研究所広報企画室 広報担当マネージャー
分科会4:生活圏・一般参加者	安在 尚人	国際環境 NGO FoE Japan 事務局長
分科会4:生活圏・一般参加者	藤岡 薫	本田技研工業株式会社知的財産部
分科会4:生活圏・一般参加者	荒木 純一	(株)本田技術研究所 専務取締役
分科会4:生活圏・一般参加者	宮本 まき子	オフィス・ジン、フリーライター
分科会4:生活圏・一般参加者	興石 淑子	エコネット・美(ちゅら) 事務局長
分科会4:生活圏・一般参加者	松原 卓郎	(株)エフエム・ソリューション 代表取締役社長
分科会4:生活圏・一般参加者	清原 廣子	株式会社 三原医学社
分科会4:生活圏・一般参加者	畑田 響	環境省地球環境局 地球温暖化防止国民生活推進室
27日全体会議参加者	城山 英明	東京大学法学部助教授(国際関係、行政、環境)
27日全体会議参加者、実行委員	山縣 睦子	MORI MORI ネットワーク 代表
メディア	村上 朝子	ジャパンタイムス
メディア	前田 ちえ子	(株)消費と生活社 編集部次長
メディア	北村 節子	読売新聞社調査研究本部 主任研究員
総合司会、実行委員	和田 幸子	富士ゼロックス株式会社監査室

事務局スタッフ	石田 靖彦	GISPRI
事務局スタッフ	相澤 佳余	経理担当
事務局スタッフ	福田 佳子	システム ツー・ワン代表取締役
事務局スタッフ	辻 麻里子	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	斎藤 陽子	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	平野 由紀子	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	田川 由紀子	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	若原 園江	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	遠藤 文江	環境問題翻訳チーム「ガイア」
事務局スタッフ	岡田 猛	東洋英和女学院大学大学院
事務局スタッフ	榎田 泰平	東洋英和女学院大学大学院
事務局スタッフ	笹川 恵理	東洋英和女学院大学大学院
事務局スタッフ	川満 雅子	東洋英和女学院大学大学院
事務局スタッフ	外川 美穂	東洋英和女学院大学大学院
事務局スタッフ	目々澤 淳	東大法学部4年
事務局スタッフ	南 育絵	東大理学部修士課程1年
事務局スタッフ	前川 祥子	元東大法学部、NTTdata
事務局スタッフ	堀 淳一郎	立教大学(エコ・ファッション)
事務局スタッフ	澤 千恵	東大教養学部4年
